「新断」輸出動向からみる減産期の原料購買に関する提言
―最近の鉄スクラップ輸出データ分析―

目　　次

Part１
はじめに ---------- １

１．09 年１－６月の HS 品種別輸出---------- １
２．「新断」の輸出
（１）月次の動き ---------- ２
（２）「新断」の輸出先---------- ３
（３）税関地別特徴
　１）税関地域別及び税関地別輸出量---------- ４
　２）税関地域別向け先別輸出量---------- ５
３．輸出増加の要因 ---------- ７
４．新断スクラップの位置---------- 10
５．グローバル化進展を前提にした購買戦略 ----------11

09 年１－６月新断輸出データ---------- 12

Part２
１．09 年７月の鉄スクラップ輸出量---------- 13
２．７月の中国向け「雑品」輸出---------- 14
３．７月の中国向け HS品目別鉄スクラップ輸出---------- 17
４．中国の 09年１－７月の鉄スクラップ輸入---------- 18

2009. ９．３

㈱鉄リサイクリング・リサーチ
代表取締役　林　誠一

Ｐａｒｔ１

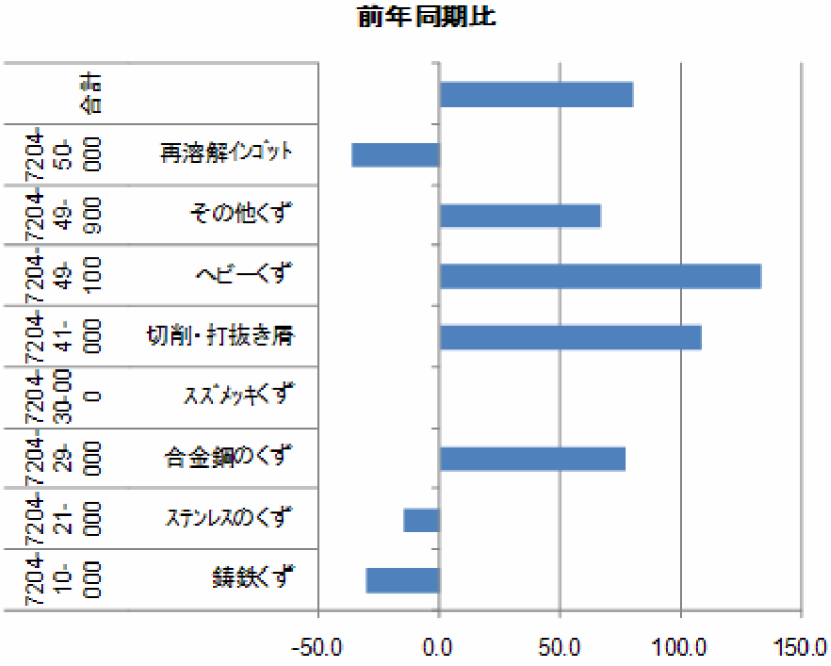
はじめに

09年 1-6月の鉄スクラップ輸出は、５月に月間 110万 tの最高を記録するなどから、555万 tの高水準を記録した。しかし内訳を推定すると高炉メーカーのリターン屑が 20%～30%含み、今後は縮小に向かうとみられる点を調査レポート NO3「最近の鉄スクラップ輸出と09年の展望」で明らかにした。また、６月に中国向けが第 1位に再浮上した点については調査レポート NO4「中国向け輸出増は「雑品」輸出の回復？」で考察した。今回は、09年 1-6月の新断輸出が前年同期比倍増していることに着目し、主に新断を使用している鉄鋼メーカー関係箇所に対して、減産期の原料購買のあり方について問うものである。

１． 09年 1-6月の HS品種別輸出

HS品目コード別に 09年 1-6月の輸出を前年同期と比較すると、ヘビー屑、切削・打抜きくず、合金鋼くず、その他屑で前年を大きく上回っている。このうち HS7204-49-100 ヘビー屑が前年の 65.6万 tから 152.8万 tに 2.3倍増となり最大の増加を示した。調査レポート NO3 でみたように減産のため高炉メーカーに滞留したリターン屑がこの品名コードで輸出されたものと推察される。次いで HS7204-41-000切削・打抜き屑が前年同期の 28.1万 tから 58.7万 tにほぼ倍増した。半期 58.7万 tは 08年計 45.4万 tをもはや超えている。そこで 09年 1-6月の輸出について、向け先別税関地別に分析する

09年 1-6月の HS品目別輸出



単位トン、%

		08年計	08.1-6	7-9	09.1-6	前年同期比
7204-10-000	鋳鉄くず	5,538	3,909	1,629	2,711	-30.6
7204-21-000	ｽﾃﾝﾚｽのくず	270,598	160,429	110,169	136,951	-14.6
7204-29-000	合金鋼のくず	39,210	19,043	20,167	33,699	77.0
7204-30-000	ｽｽﾞﾒｯｷくず	25		25	8	
7204-41-000	切削･打抜き屑	454,102	281,944	172,158	586,711	**108.1**
7204-49-100	ヘビーくず	1,071,375	656,358	415,017	1,528,476	**132.9**
7204-49-900	その他くず	3,585,235	1,961,615	1,623,620	3,258,003	66.1
7204-50-000	再溶解ｲﾝｺﾞｯﾄ	11,180	9,250	1,930	5,872	-36.5
合計		5,437,263	3,092,548	2,344,715	5,552,431	79.5

データ;財務省「通関統計」

２.「新断」の輸出

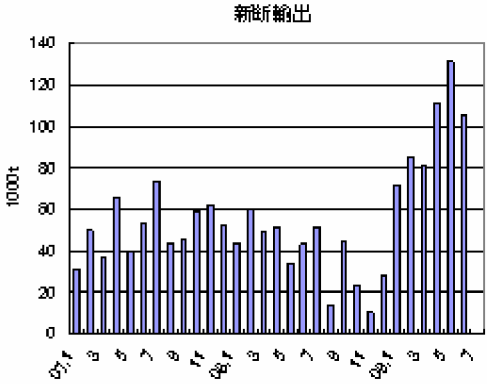
HS7204-41-000の品目は、和名；切削くず及び打ち抜きくず（束ねてあるかを問わない）、英字；Turnings, shavings, chips, milling waste, sawdust, filings, trimmings and stampings, whether or not in bundlesである。６桁コードの規定であり世界共通の定義である。日本の場合、ほとんどが「新断」であるとみなして、この通関コードにつき分析を進める。同じ範疇にある切削くず（＝鋼ダライ）は輸送効率悪く、今まであまり輸出されていない（ヒアリング情報）。また、バラかバンドル（束ねて有るもの）かは問われないが、プレスされたものや切り板、フープ状の切断くずは HS7204-49-900 その他くずにて通関される場合もあり得る。しかし、価格や流通が異なるため現実は少ないと考察するが、「その他くず」に混入している場合、量の把握はできず、従って真の新断輸出量はHS7204-41-000よりも大きいと考察される。

（１）月次の動き

2007年 1月から現在までの HS7204-41-000による輸出量推移を分析した。07年の月平均４.8万 tは 08年には 3.8万 tに低下する（日本は９月まで増産期であつたことが背景にあると思われる）が、09年 1-6月は 9.8万 tに拡大する。07年～08年の各月の動きは平均値に対して増減の振幅が少ないことから、かなり固定的に輸出されていたと推察される。しかし、09年 1-6月では 1月の 7.1万 tから５月には 13.1万 tに拡大し、６月は 10.5万 tとなるなど変動が大きい。

単位1000t

	07年	08年	09年
1	31.1	43.5	71.5
2	50.3	59.6	85.2
3	36.4	49.9	81.4
4	66.2	51.7	111.6
5	39.7	34.1	**131.2**
6	53.6	43.3	105.6
7	73.9	51.7	
8	44.0	13.5	
9	44.9	44.7	
10	59.3	23.5	
11	62.4	10.3	
12	52.1	28.5	
年計	569.9	454.3	586.5
月平均	47.5	37.9	97.8



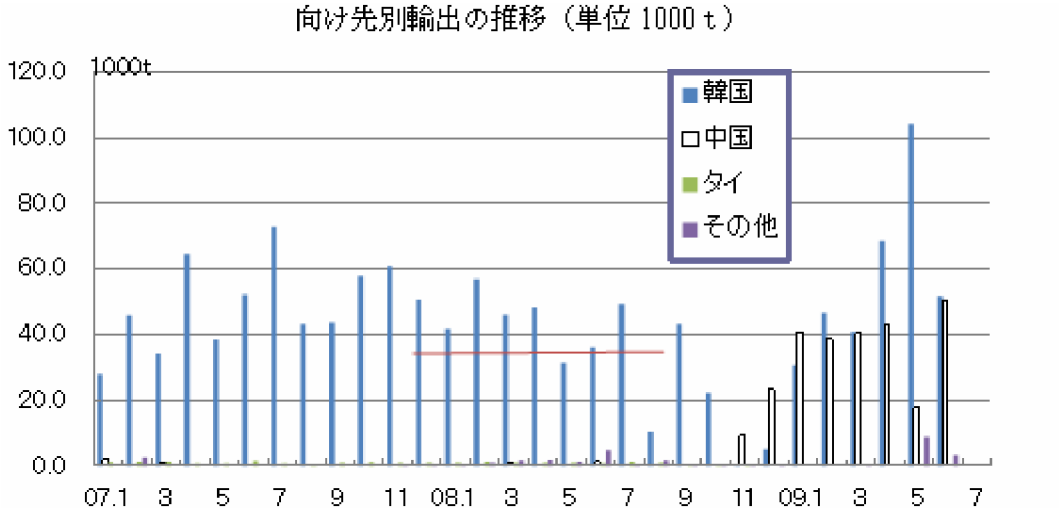
（２）「新断」の輸出先

次に向け先別推移をみると、中国が台頭し、台湾、インドネシア、ベトナムなど多様化が進みつつあることが明らである。

韓国向けは 07年当時全体の 96.7%を占め「新断」輸出先の主体だったが、08年は 86.4%となり、 09年 1-6月は 58.5%に低下している。しかし各月をみると、ほぼ毎月４万 t前後であり、 09 年になっても増え気味だがあまり変りないことから、ユーザーは固定的と見られる。これに対して中国向けは 07年は 0.7%（年間 0.4万 t）程度だったが、 08年 11月の価格下落時、 0.9万 tを皮切りに 12月 2.3万 tとなり、 08年計は 3.6万ｔと全体の８％に増大した。さらに 09年になっても月間４万 t前後が持続し 1-6月計は 23万ｔと全体の 39%に躍進している。低価格を目当てに始まった日本ソース増が、 09 年になって韓国とほぼ同レベルで定着しつつある。

HS7204-41-000の輸出先　　単位1000t

	韓国	中国	タイ	その他	計	その他内訳
07.1	28.0	1.9	1.2		31.1	
2	46.0	0.2	1.4	2.7	50.3	台湾2.7
3	34.3	0.8	1.3		36.4	
4	64.7	0.6	0.9		66.2	
5	38.6	0.2	0.9		39.7	
6	52.4		1.7		53.6	
7	73.0		0.9		73.9	
8	43.3		0.7		44.0	
9	43.8		1.1		44.9	
10	57.9	0.2	1.2		59.3	
11	61.0	0.1	1.1	0.2	62.4	
12	50.8	0.1	1.0	0.2	52.1	
08.1	41.9		1.0	0.6	43.5	ﾈｼｱ0.6
2	57.0	0.3	1.3	1.0	59.6	
3	46.2	0.8	1.1	1.8	49.9	ﾈｼｱ1.8
4	48.4	0.3	1.1	1.9	51.7	ﾈｼｱ1.9
5	31.5	0.2	1.0	1.4	34.1	ﾈｼｱ1.4
6	36.2	1.3	0.8	**4.8**	43.1	台湾1.7、ﾈｼｱ1.1、ｽｲｽ2
7	49.4	0.3	1.4	0.6	51.7	ﾈｼｱ0.6
8	10.4	0.2	1.1	1.8	13.5	ﾈｼｱ1.8
9	43.3	0.2	0.6	0.6	44.7	ﾈｼｱ0.6
10	22.4	0.3	0.6	0.2	23.5	ﾈｼｱ0.1
11	0.6	9.3	0.2	0.2	10.3	
12	5.1	23.3		0.1	28.5	
09.1	30.9	40.6			71.5	
2	46.8	38.6			85.4	
3	40.9	40.4		0.1	81.4	
4	68.7	42.9			111.6	
5	104.4	17.8		9.0	**131.2**	台湾6、ﾍﾞﾄﾅﾑ3
6	51.8	50.4		3.4	105.6	ﾈｼｱ3.3
7						
07年計	593.8	4.1	13.4	3.1	613.9	
08年計	392.4	36.5	10.2	15.0	454.1	
09.1-6	343.5	230.7	0.0	12.5	586.7	



（３）税関地別特徴

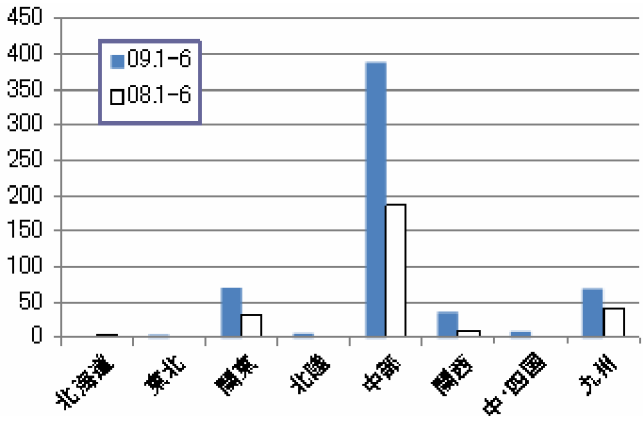
１）税関地域別及び税関地別輸出量

09年 1-6月の「新断」輸出量を税関地域別にみると中部が 66.2%を占めて最大であり、次いで関東 12.1%、九州 11.9%、関西 6.2%等である。上位 4地域で 96%以上を占めるが、中部地域に突出しており九州が関東並みとなっている。新断の発生は鋼板の使用を主とする自動車、家電、OA機器、自動販売機などの製造業集積地であることが、日本鉄源協会「加工スクラップ発生実態調査」で判っており、税関地域特性は、以上の結果を反映していると考察する。前年同期との比較では中部、関東が倍増、関西は量は小さいが ３倍増、九州は 60%増しであった。

税関地別では名古屋が 16.4万 tで 1位、次いで衣浦 15.8万 t、豊橋 5.1万 tであり上位３税関地は愛知県だが、４位に戸畑 3.8万 tがあり注目される。５位川崎 3.2万 tまでの５ヶ所のカバー率は 09年 1-6月で 75.7%（08年 1-6月は 83.0%）であり、前年よりも多元化している。

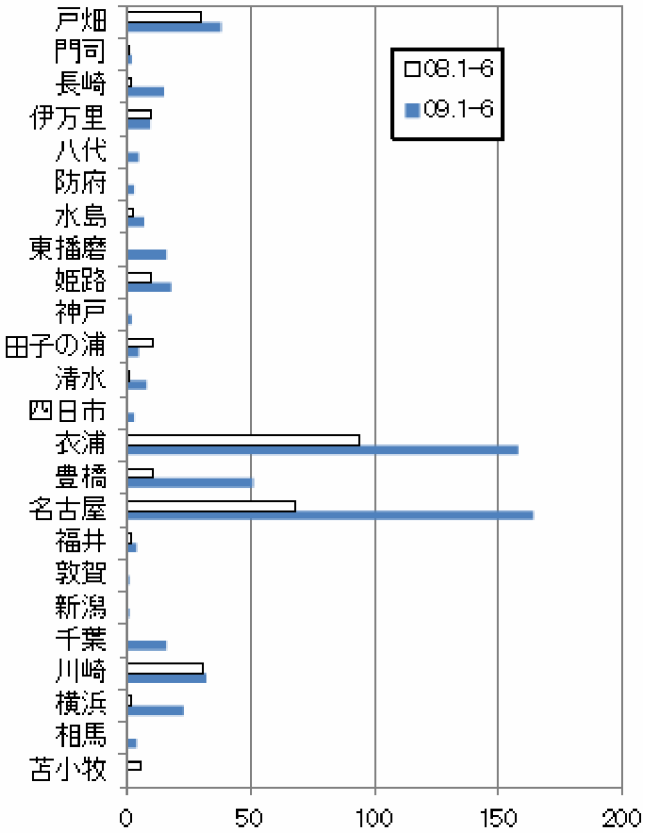
単位1000t、%

	09.1-6	構成比	08.1-6	構成比
北海道	0	0.0	5.5	1.9
東北	4.2	0.7	0	0.0
関東	70.8	12.1	33.0	11.7
北陸	6.7	1.1	2.6	0.9
中部	388.6	66.2	186.9	66.2
関西	36.6	6.2	9.8	3.5
中･四国	10	1.7	2.2	0.8
九州	69.7	11.9	42.2	15.0
全国計	586.7	100.0	282.2	100.0



税関地別輸出量（7204-41-000、09 年 1-6 月、08.1-6 月）

	09.1-6	08.1-6
苫小牧		5.5
相馬	4	
横浜	23	2
川崎	32	31
千葉	16	
新潟	1	0.5
敦賀	1	
福井	4	2
名古屋	164	68
豊橋	51	11
衣浦	158	94
四日市	3	
清水	8	1.4
田子の浦	5	11
神戸	2	
姫路	18	9.7
東播磨	16	
水島	7	2.2
防府	3	
八代	5	
伊万里	9.5	10
長崎	15	1.5
門司	2	0.6
戸畑	38	30
	585.5	280.4



２）税関地域別向け先別輸出量

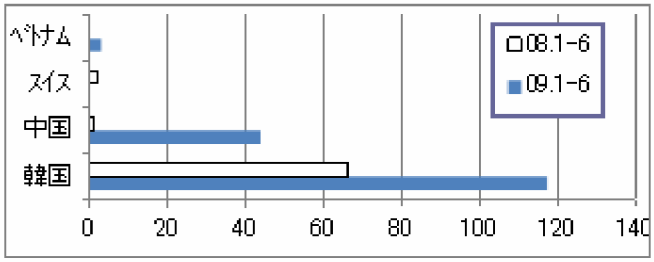
09年 1-6月の上位５ヶ所を税関地別向け先別に前年同期と比較した。その結果、①前年同期に比べ倍増に導いたのは上位３税関（名古屋、衣浦、豊橋）である。②上位５ヶ所とも中国向けが新規に著増している　③韓国向けは税関地によって増減が異なる　などが明らかとなった。特に名古屋、豊橋では韓国向けを倍増させたが、衣浦では前年同期と同量。川崎では韓国向けを半減させ、中国に向けている。また戸畑では韓国向けを 25%減らし、中国とインドネシア向けを増加させている。

以上を見ていくと、衣浦の韓国向けはユーザーが固定的と推察される。また、各地における中国向けの今後の動向が注目される。しかしこうした 09年 1-6月の変化の特徴は、国内の原料購買の対応に問題があった（隙きがあった）結果ではないだろうか。

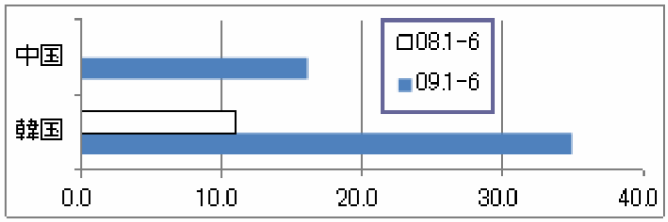
主要上位５税関地の向け先（09　1-6、08　1-6）

単位1000t

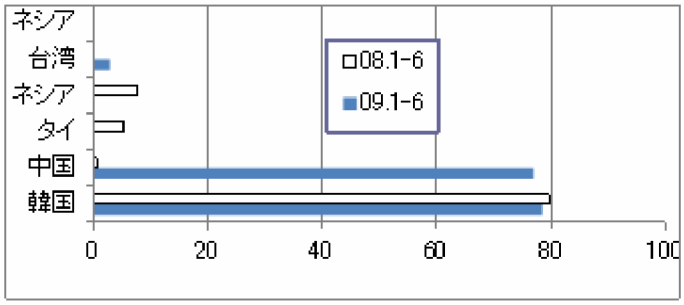
		09.1-6	08.1-6
名古屋	韓国	**117.1**	66.0
	中国	**43.8**	1.0
	ｽｲｽ		2.0
	ﾍﾞﾄﾅﾑ	3	
	計	163.9	69.0



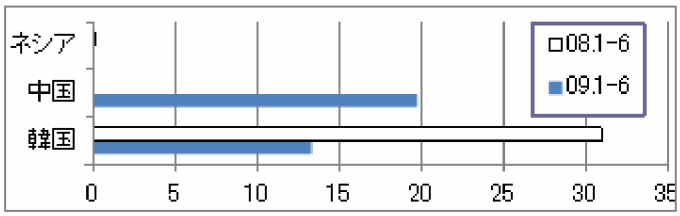
		09.1-6	08.1-6
豊橋	韓国	**34.9**	11.0
	中国	**16.1**	
	計	51.0	11.0



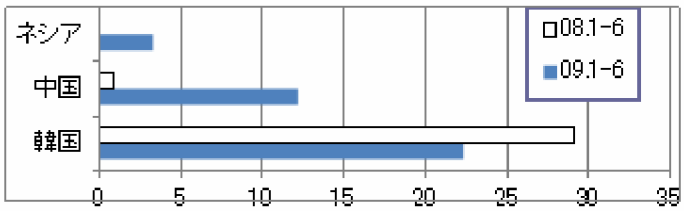
		09.1-6	08.1-6
衣浦	韓国	78.4	79.7
	中国	**76.9**	0.5
	ﾀｲ		5.3
	ﾈｼｱ		7.8
	台湾	2.8	
	ﾈｼｱ	0.1	
	計	158.2	93.3



		09.1-6	08.1-6
川崎	韓国	13.3	30.9
	中国	**19.7**	
	ﾈｼｱ		0.1
	計	33.0	31.0



		09.1-6	08.1-6
戸畑	韓国	22.3	29.1
	中国	**12.2**	0.9
	ﾈｼｱ	**3.3**	
	計	37.8	30.0



３．輸出増加の要因

「新断」輸出が倍増した要因に、発生と国内需要のギャップがあげられる。08年９月アメリカの大手証券会社リーマン・ブラザーズの破綻を起因として 10月から始った世界金融危機の勃発により、地球規模での実態経済の不振は鉄鋼需要を減退させ、鉄鋼生産減産を余儀なくさせた。鉄鋼需要の減少とは製造業の生産活動減少であり、すなわち新断スクラップの発生減少につながる。一方、鉄鋼生産減産は鉄スクラップ使用の減量となる。

発生量を表す統計はないが、新断は鋼板類を使用して製品とする製造業の生産活動から発生するスクラップであることから、製造業の関係部門における鋼材消費量増減そのものが発生の増減となると言える。

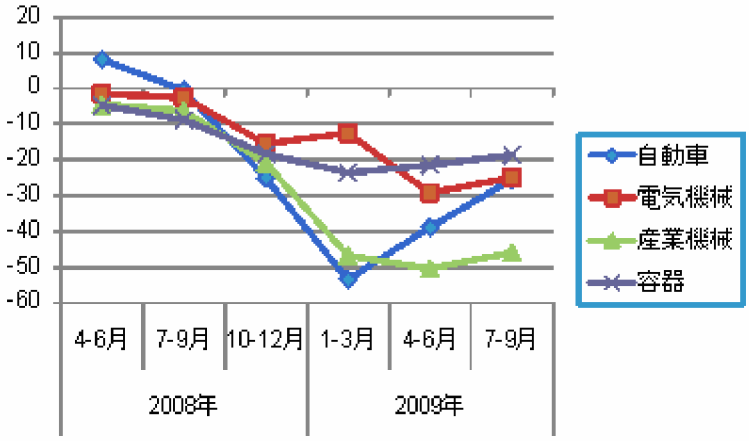
部門別鋼材消費量は、経済産業省が毎四半期末に翌期の需給見通しを策定するときの根拠として推計を行っている。昨年 4-6月から本年 7-9月までの新断発生に係ると見られる主力関係部門（自動車、電気機械部門、産業機械、容器）の推定結果は以下の通りである。このうち新断発生の主体である自動車部門をみると、自動車生産の減産を反映して、09年 1-3月には前年同期比－53.5%まで落ち込み、その後徐々に回復となるものの、4-6月－38.9%、7-9月は－25.6%と見ている。7-9月については、カーメーカーの生産計画が上方に修正されたため、現状はもう少し上方となると推察するが、09年 1-6月では厳しい状態が続いた。自動車部門鋼材消費量の 09年 1-6月通期は－32.4%となる。新断はフローで発生するスクラップであり、この減少率そのものが発生に係ると考える。

部門別鋼材需要・前年同期比

単位%

	2008年			2009年		
	4-6月	7-9月	10-12月	1-3月	4-6月	7-9月
自動車	8.1	-0.5	-25.1	-53.5	-38.9	-25.6
電気機械	-1.5	-2.5	-15.5	-12.5	-29.2	-24.9
産業機械	-4.5	-6.2	-20.8	-46.8	-50.4	-45.9
容器	-4.7	-8.8	-18.3	-23.6	-21.5	-18.6

データ:経済産業省「09年度第2四半期鋼材需要見通し」



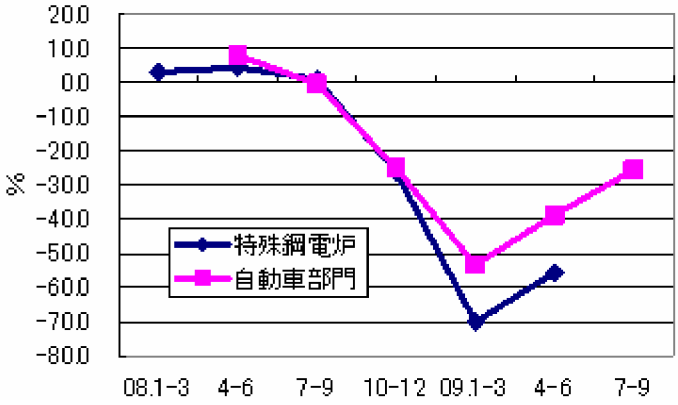
一方、需要側である鉄鋼メーカーも今回の不況では大きな痛手を負っている。08年 10月より各社とも減産調整に入り、高炉メーカーも 09年 1月から４基の高炉を休止させた。

新断を主原料とする特殊鋼電炉メーカーの粗鋼生産の推移を鉄鋼連盟資料より整理すると、 08年 10-12月に前年同期比－ 26.1%のマイナスに転じ、 091-3月は－ 70.0%（＝３割稼動ということになる）に落ち込み、 4-6月はやや回復して－ 55.6%の水準にある。この動きは先に述べた経済産業省が推定した自動車部門鋼材消費の前年同期比とほぼ一致した。特殊鋼電炉の動きで 1-3、 4-6月のマイナスが深いのは産業機械等の落ち込みが加わっていると推察する。 09年 1-6月通期の減産率は前年同期比－ 62.7%（＝前年比 4割稼動）の水準である。

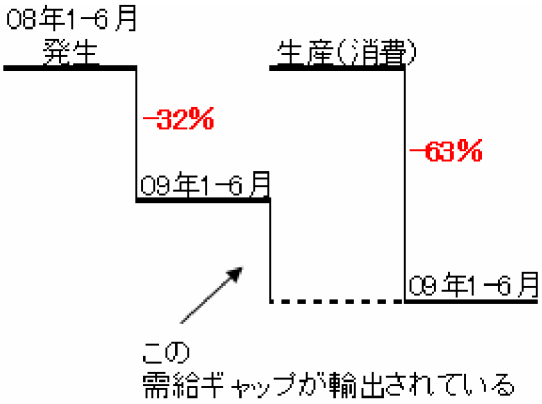
単位%

	特殊鋼電炉	自動車部門
08.1-3	3.1	
4-6	4.3	8.1
7-9	1.1	-0.5
10-12	-26.1	-25.1
09.1-3	-70.0	-53.5
4-6	-55.6	-38.9
7-9		-25.6

特殊鋼電炉;鉄鋼連盟資料
自動車部門;経産省需要見通し



以上をまとめると 09年 1-6月通期で発生（＝自動車部門鋼材消費を代用）は－ 32.4%、需要（＝特殊鋼電炉粗鋼生産で代用）は－ 62.7%であり、この需給ギャップを解消させるために輸出されたと解釈した。



４．新断スクラップの位置

新断は、鉄鋼メーカーから出荷された鋼板類を製品化する時に発生する歩留まり落ちのスクラップであり　①品位の由来が解ること　②工場発生くずであり混ざり物がないことなどから高品位のスクラップに位置する。鉄スクラップを品位や使い勝手の序列で考えると　第 1位は自工場内で発生する自家発生屑、第 2位に製造業で発生する新断を主とする加工スクラップ　第３位はさまざまな老朽化したものがくず化した老廃スクラップと挙げられる。このため新断は古くから厳しい鋼の品質が要求される特殊鋼電炉メーカーの主原料となっており、近年は高炉メーカーがこれに加わっている。また、２位、３位は市中で発生するスクラップであり、日本は３対７の割合であって、選別処理が必要な老廃スクラップが７割も存在し、しかも社会の高度化にあわせて軽薄短小型の複合鋼材が増加する方向にある。そのなか新断は市中くずでも高品位な国産の貴重な資源として位置づけられる。従って流通時では加工処理がバンドル程度であるにも係らず、ギロチンで裁断処理したＨ２よりも 2000円 /t から 2500円 /t （その時の需給により格差は変動するが）高額となっている。その新断が輸出されるということは、「雑品」が銅などの非鉄金属を採取するために中国に輸出されているのに対して、鉄鋼業にとって直接影響のある高級な循環資源の流出が行われていると認識すべきである。

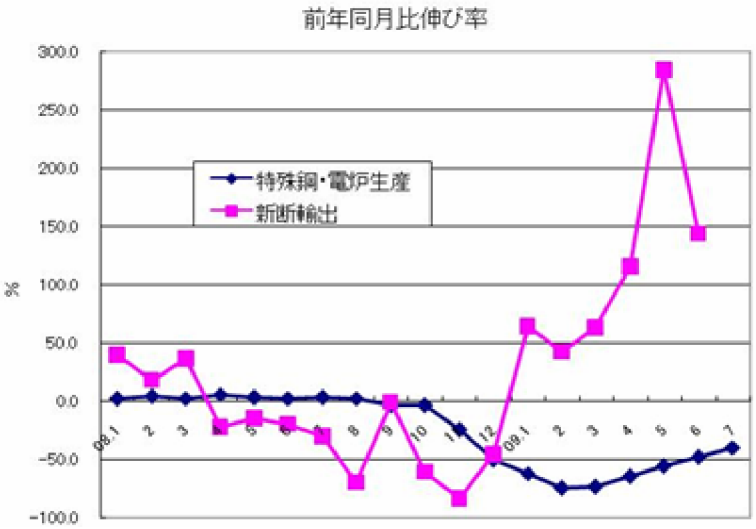
折りしも来春には、新断の供給基地である中部地区にＴ社田原製鉄所が新規稼動をはじめる。薄板の生産拠点となると聞いており、となれば新断の需要増につながる。新断の需給環境はより加熱となり､むしろ日本の鉄スクラップ価格は関東の H2が主導するのでなく、今後は名古屋地区の新断がこれに入れ替わる予感さえする。

新断の例

５．グローバル化の進展を前提にした購買戦略

市場原理のもとグローバリゼーションの動きは否応なしに進んでいる。もはや日本の新断は国内循環資源に留まらず東アジアで使用が定着しつつあることを 09年 1-6月の「新断」輸出が現している。価格を上げれば戻ってくるという単純な対策では済まず、相手国ユーザーと競争せざるを得ない状況にあることを念頭におくべきであり、その結果、自らの首を絞めることになるだろう。ほしい時にすぐ手に入る時代は過去のものとなりつつある。今さら対策を立てようもないかもしれないが、新断のような高品位スクラップに関しては「増産期に買い増し、減産期は買わない」というセオリー？について、この際考え直してみてはどうだろうか。すなわち「減産期でも買い続ける」自衛手段を講じる必要があるのではないか。09年 1-6月の「新断」輸出倍増問題がその契機となることを願ってやまない。

「新断」輸出と特殊鋼電炉粗鋼生産推移



72-4-41-000 新断　　単位トン

		2009年1月	2月	3月	4月	5月	6月	1-6平均	1-6累計	08.1-6
北海道	函館								0	
	室蘭								0	
	苫小牧								0	5,450
	釧路								0	
	石狩								0	
	十勝								0	0
	計	0	0	0	0	0	0		0	5,450
東北	塩釜								0	
	釜石								0	
	石巻								0	
	酒田								0	
	秋田船川								0	
	青森								0	
	八戸								0	
	小名浜								0	
	相馬		2,039		2,199				4,238	
	計	0	2,039	0	2,199	0	0		4,238	0
関東	目立								0	
	横浜	9,735	3,300	2,718	450	4,972	1,801	3,829	22,976	2,004
	川崎	3,182	917	6,943	6,099	9,526	3,372	5,335	32,009	31,007
	横須賀								0	
	千葉			3,603	2,911	5,669	3,437	2,640	15,842	
	木更津								0	
	東京								0	6
	計	14,087	4,217	13,266	9,460	20,367	8,610	11,805	70,827	33,017
<東日本>合計		14,087	6,256	13,266	11,659	20,367	8,610	12,511	75,065	38,467
北陸	新潟		1,069				239		1,307	634
	直江津								0	
	伏木								0	
	金沢								0	
	伏木								0	
	富山								0	
	敦賀		1,102						1,102	
	福井						4,262		4,262	2,002
	計	0	2,170	0	0	0	4,501		6,671	2,636
中部	名古屋	16,929	26,876	24,469	25,186	40,940	21,503	27,319	163,911	68,980
	豊橋	8,763	9,342	6,734	11,575	5,249	9,350	8,502	51,013	11,341
	衣浦	14,865	27,726	22,376	30,019	32,641	30,439	26,378	158,266	94,260
	四日市						2,772	462	2,772	
	清水	1,003	2,646		1,964		2,003	1,269	7,616	1,361
	田子の浦	2,734		1,078	1,249			843	5,058	10,988
	御前崎								0	0
	計	44,294	66,590	54,654	69,993	87,030	66,067	64,773	388,636	186,930
<北陸・中部>合計		44,294	68,760	54,654	69,993	87,030	70,568	65,885	395,307	189,566
関西	舞鶴								0	
	大阪			14	112	18			144	39
	堺								0	
	岸和田								0	
	神戸			14			2,015		2,029	
	尼崎								0	
	姫路			2,403	7,715	3,753	3,960		17,832	9,749
	東播磨		1,500	2,002	2,893	1,999	7,364		15,760	
	和歌山			804					804	0
	計	0	1,500	5,237	10,723	5,770	13,339	6,095	36,569	9,787
中・四国	宇野								0	
	水島			2,750		2,200	2,200		7,150	2,200
	福山								0	
	呉								0	
	広島								0	
	徳山								0	
	境								0	
	防府		1,396		1,500				2,896	
	松山								0	
	新居浜								0	
	阪田								0	
	西岡								0	
	高知								0	
	小松島								0	0
	計	0	1,396	2,750	1,500	2,200	2,200	1,874	10,046	2,200
九州	宮崎空港								0	
	細島								0	
	三角								0	
	八代	3,253			2,006				5,259	
	唐津								0	
	伊万里		2,175	2,000		3,853	1,525	1,592	9,553	10,014
	鹿児島						300		300	
	川内								0	
	大分								0	
	長崎	2,700	1,634	1,500	5,058	4,242		2,522	15,134	1,528
	佐世保								0	
	門司	380	197		327	559	240	279	1,673	561
	新田								0	209
	戸畑	6,064	3,470	1,961	10,336	7,167	8,809	6,301	37,807	29,911
	博多								0	
	三池								0	
	沖縄								0	
	沖縄支署								0	0
	計	12,367	7,476	5,461	17,727	15,821	10,874	11,621	69,726	42,223
<西日本>合計		12,367	10,372	13,448	29,950	23,791	26,413	19,390	116,341	54,210
<日本>合計		71,548	85,388	81,368	111,602	131,216	105,591	97,786	586,713	282,243

Ｐａｒｔ２

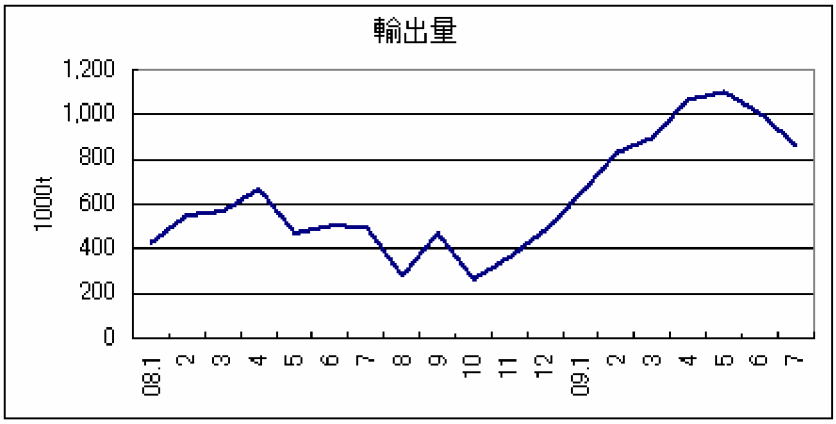
１． 2009年７月の鉄スクラップ輸出量

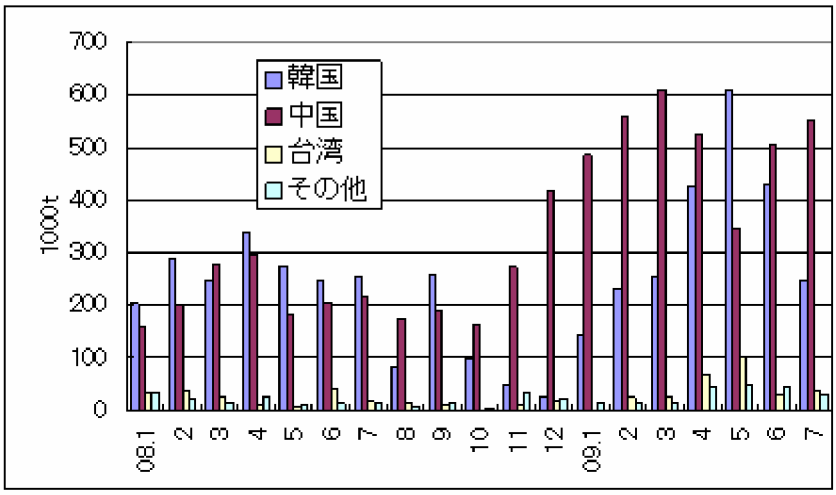
（１）中国向け１位持続、韓国向けは通常ベースに

鉄スクラップ輸出量は、世界金融危機が勃発した 08年 10月の 26万 tを底に月を追って増加をたどり、 09年５月には月間史上最高の 110万 tを記録した。その後６月は 100.7万 tに低下し、７月はさらに 86.4万ｔに低下して、年初の 60万ｔベースに戻りつつある。

09年 1-7月累計は 641.7万ｔとなり、もはや 08年の 543.7万ｔを超えて 07年の 645万ｔに近いる。8月～12月は韓国や中国の動向次第だが、月 70万ｔベースとして 350万ｔを加えると 990万ｔ程度が見込まれる。しかしこれには中国向け「雑品」が含まれるため、加工処理した鉄スクラップ輸出は 850万ｔ前後と推察する。いずれにせよ過去最高だった06年の 765万ｔを超えると見通される。

７月の輸出量を向け先別にみると、１位中国 55.3万ｔ、２位韓国 24.6万ｔ、３位台湾 3.5万ｔ等であり、前月に比べ韓国が半減し年初ベースに戻った。中国は前月に引き続き 55.3万ｔの高レベルにある。





データ；日本鉄源協会（財務省通関統計）

単位1000 t ,%

	輸出量	韓国	中国	台湾	その他
08.1	429	204	160	32	33
2	551	288	202	38	23
3	567	247	278	26	16
4	669	338	298	8	25
5	471	274	181	5	11
6	502	245	206	39	12
7	500	253	218	17	12
8	279	81	175	16	7
9	469	259	188	10	12
10	264	99	161	0	4
11	362	49	272	8	33
12	484	25	418	18	23
09.1	646	145	485	0	16
2	831	231	560	25	15
3	898	252	609	25	12
4	1,068	427	526	69	46
5	1,103	607	347	100	49
6	1,007	429	505	28	45
7	864	246	553	35	30
09.1-7	6,417	2,337	3,585	282	213
06.1-7	3,689	1,849	1,543	165	132
前年比	73.9	26.4	132.3	70.9	61.4

２．７月の中国向け「雑品」輸出

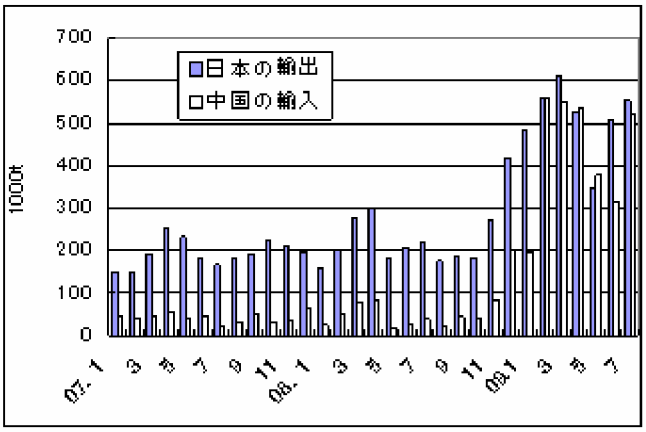
中国向け輸出量は、同じ HSナンバーでも中国の海関統計による日本からの輸入量と輸送上のタイムラグを超えた差異がある。これは調査レポート NO4 で述べたように「中国は一部を銅スクラップとして通関しているため」と推察した。銅が付着した未解体の鉄スクラップは、「雑品」として中国の銅需要急増と安価な労働力を求め、また大型機械は解体に広い場所が必要なこともあり、未解体（未処理）のまま輸出されることが 2003年ごろより顕在化した。日本の輸出通関は主成分が鉄のため鉄スクラップとしているが、中国では銅資源として通関している違いがある。

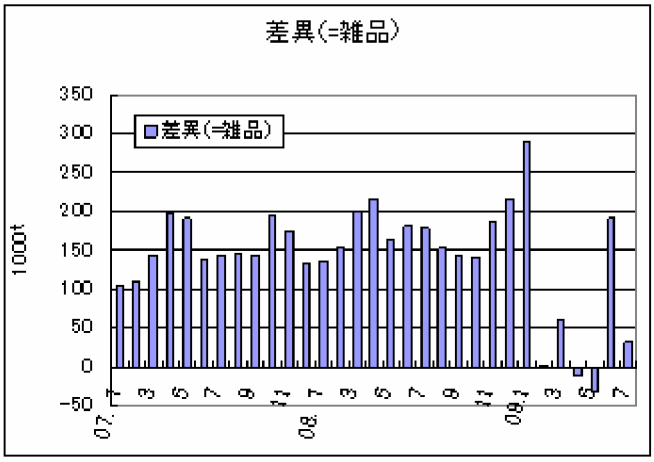
（１）鉄スクラップ HS7204での差異

2009年７月は、日本の中国向け輸出量 55.3万 tに対して、中国の輸入量は 52.1万 tであり、3.2万 tの差異があり、この差異が「雑品」とみなされる。同様にして算出した前月の 19.1万 tから大きく減少した。しかしこの差異は 09年になって４月、５月はマイナスとなるなど安定していない。廃家電類の輸入については、中国政府は輸入規制を実施しているが、さらにこの 7月に細目を公布して規制強化の方向にある。3.2万 tが正しい輸入量かどうかはグレーゾーンの存在（調査レポート NO2、NO4 参照）を含め、何ともいえない状態である。もうしばらく様子をみる必要があるだろう。

鉄スクラップ　　単位1000t

	中国向け 日本の輸出	日本から 中国の輸入	差異(=雑品)
07. 1	149	45	104
2	151	42	109
3	191	47	144
4	252	55	197
5	231	40	191
6	183	45	138
7	165	21	144
8	179	33	146
9	192	49	143
10	225	30	195
11	211	37	174
12	196	62	134
08. 1	160	24	136
2	202	48	154
3	278	79	199
4	298	82	216
5	181	17	164
6	206	25	181
7	218	39	179
8	175	22	153
9	188	44	144
10	181	40	141
11	272	85	187
12	418	203	215
09.1	485	196	289
2	560	**558**	2
3	**609**	**549**	60
4	526	**537**	−11
5	347	378	−31
6	505	314	191
7	553	521	32
071−12	2,328	507	1,821
081−12	2,757	708	2,049
091−7	3,585	3,053	532
07月平均	194	42	152
08月平均	231	59	172
091−7平均	512	436	76





（２）銅スクラップ HS7404での差異

鉄スクラップで輸出通関したものの一部を銅スクラップで輸入通関しているのであれば、銅スクラップ HS7404でも差異が生じる。

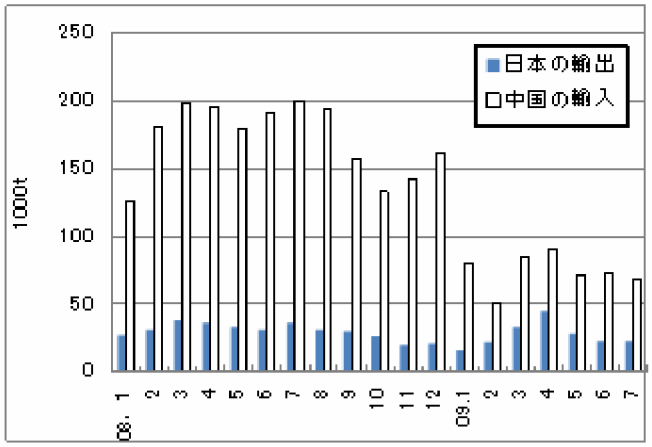
7月の日本から中国へ輸出された銅スクラップ HS7404通関量は 2.3万 tであり、前月と同量だった。自動車解体時に選別されるハーネス類を主とする。これに対して中国が日本から輸入した同じ品目 NOの銅スクラップは 6.8万 tであり、この差異 4.5万 tが「雑品」に該当すると推察される。差異は 09年になって 08年の月平均 14.2万 tに対して 4.7万 tと１ /3以下に激減しているが２月の 2.9万 tを除き、ほぼ４万ｔ～５万 tの間となっている。しかし１ /3減は減りすぎという見方もある。

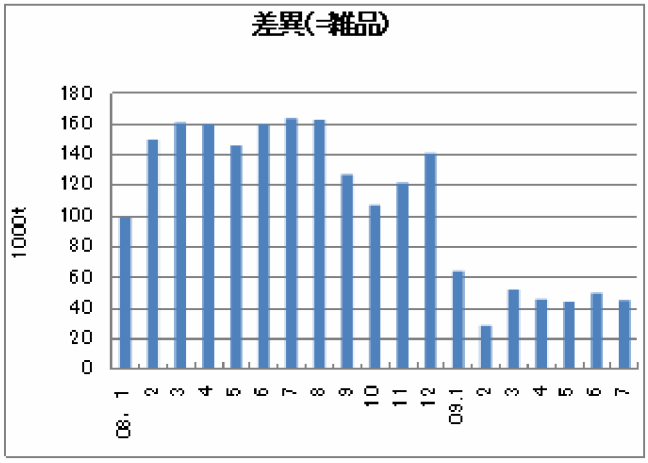
前述した鉄スクラップ通関量の差異 3.5万 tと銅スクラップの差異 4.5万 tの間が「雑品」の輸出量と推察されるが、現状ではデータからの解明は限界となっている。

銅スクラップ　　単位 1000t

	中国向け日本の輸出	日本から中国の輸入	差異(=雑品)
08. 1	27	126	99
2	31	181	150
3	38	199	161
4	36	196	160
5	33	179	146
6	31	191	160
7	36	200	164
8	31	194	163
9	30	157	127
10	26	133	107
11	20	142	122
12	21	162	141
09.1	16	80	64
2	22	51	29
3	33	85	52
4	45	91	46
5	28	72	44
6	23	73	50
7	23	68	45
071-12	381	2,071	1690
081-12	360	2,060	1700
091-7	190	520	330
07月平均	32	173	141
08月平均	30	172	142
091-7平均	27	74	47

日本の輸出＝財務省通関統計
中国の輸入＝海関統計





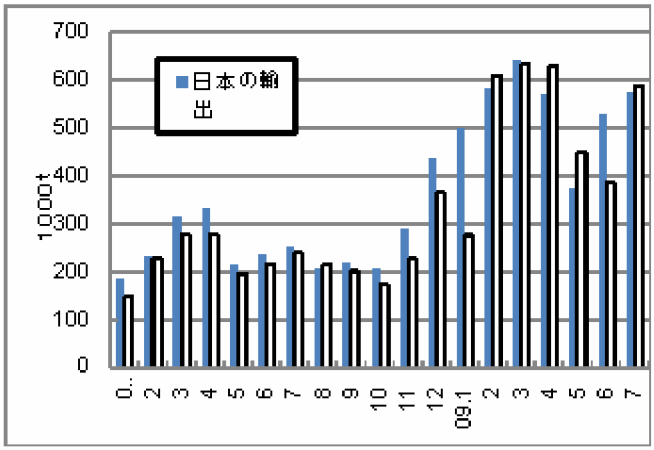
（３）鉄スクラップと銅スクラップを加えた差異

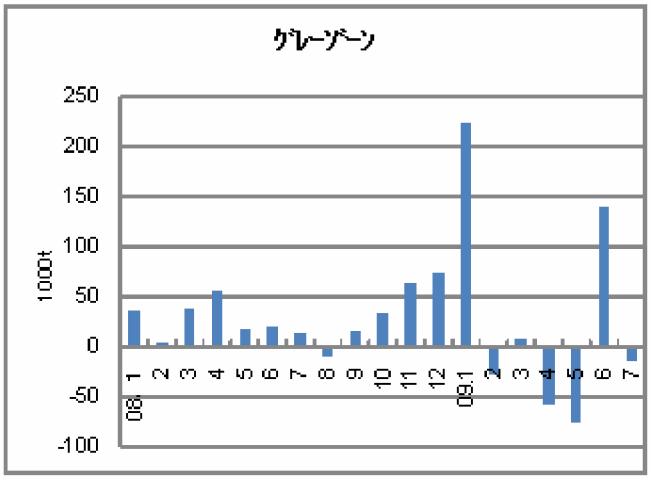
２つの通関統計の取り違えであるなら、２つを加えたものの差異はほぼ一致するはずである。

７月は日本の輸出 57.6万 tに対して、中国の輸入は 58.9万 tであり、差異は－1.3万 tとなった。前月の 14.1万 tに比べ改善されている。この差異の 09年 1-7月平均は 3.1万 tであり差異率は 5.8%。 08年の 11.1%に比べ少なくなってきている。増値税の見直しなどの制度の改善強化がグレーゾーンを縮小してきているとも取れる。

鉄スクラップ＋銅スクラップ　　単位1000t

	中国向け日本の輸出	日本から中国の輸入	ｸﾞﾚｰｿﾞｰﾝ
08. 1	187	150	37
2	233	229	4
3	316	278	38
4	334	278	56
5	214	196	18
6	237	216	21
7	254	239	15
8	206	216	-10
9	218	201	17
10	207	173	34
11	292	227	65
12	439	365	74
09.1	501	276	225
2	582	609	-27
3	642	634	8
4	571	628	-57
5	375	450	-75
6	528	387	141
7	576	589	-13
071-12	2709	2578	131
081-12	3117	2768	349
091-7	3,775	3,573	215
07月平均	226	215	11
08月平均	260	231	29
091-7平均	539	510	31





３．７月の中国向け HS品目別鉄スクラップ輸出

「雑品」を 3.5万 tとした場合の７月の中国向け輸出 55.3万 tの HS品目別輸出を整理すると、「新断」（HS7204-41-000）は 5.1万 t（全体の 9.7%）、ヘビー屑 9.9万 t（9.2%）、「雑品」 3.5万 t（5.8%）、その他くず 37.4万 t（67.6%）、その他合金鋼くず０である。

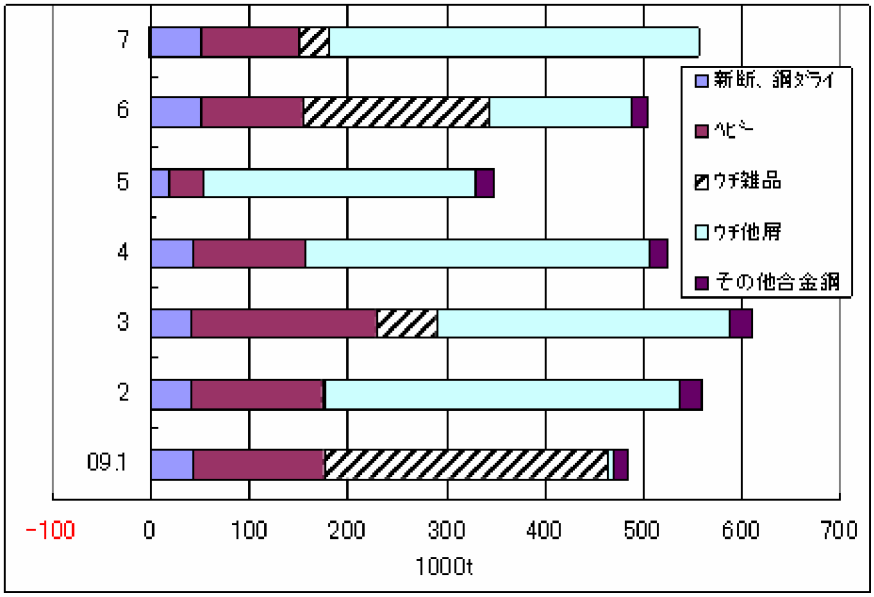
前月に比べ、「新断」は同量、ヘビーくずはやや減少のなか、その他くずの増加が目立つ。成約時の６月の価格は 2.3万円 /t 前後であり、 7月は 2.5万円 /t 、８月は 3万円 /t に上昇している。低価格であることから昨年の 11月から引き合いを増加させてきた中国は、購入できる価格の限界に近付いていると思われ、この 7月をピークに減少となるか注目される。

中国向け輸出内訳（雑品は推計）　　単位1000t

	7204	72-4-41-000	7204-49-100	7204-49-900			
	輸出計	新断、鋼ｽﾗｲ	ﾍﾋﾞｰ	その他屑	ｳﾁ雑品	ｳﾁ他屑	その他合金鋼屑等
09.1	485	41	135	294	289	5	15
2	560	39	135	362	2	360	24
3	**609**	40	**189**	**358**	60	298	22
4	526	43	114	349	0	349	20
5	347	18	35	277	0	277	17
6	505	50	103	336	191	145	16
7	553	51	99	406	32	374	-3
09.1-7	3,585	282	810	2,382	574	1,808	111

構成比　　単位％

	輸出計	新断、鋼ｽﾗｲ	ﾍﾋﾞｰ	その他屑	ｳﾁ雑品	ｳﾁ他屑	その他合金鋼屑等
09.1	100	8.5	27.8	60.6	59.6	1.0	3.1
2	100	7.0	24.1	64.6	0.4	64.3	4.3
3	100	6.6	**31.0**	58.8	9.9	48.9	3.6
4	100	8.2	21.7	66.3	0.0	66.3	3.8
5	100	5.2	10.1	79.8	0.0	79.8	4.9
6	100	9.9	20.4	66.5	37.8	28.7	3.2
7	100	9.2	17.9	73.4	5.8	67.6	-0.5



４．中国の 09年１－７月の鉄スクラップ輸入

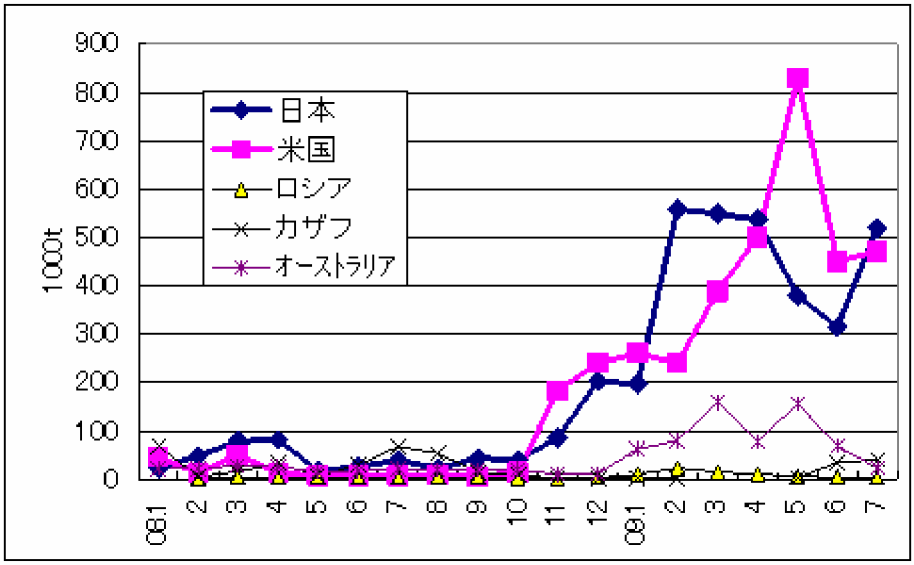
世界の鉄スクラップ相場が低位に推移していることから、昨年末から今年にかけて中国の鉄スクラップ輸入量は、日本からのみならず例年にない増勢が続いている。

７月は世界から 129万 t輸入し、 09年 1-7月累計は 887.2万 tの高レベルとなった。 08年計が 359万 tなのですでに昨年の 2.5倍に達した。今後の世界市況は米国や日本の鉄鋼生産回復により需給はタイトに向かうと見られることから、増勢テンポは緩むと想定されるが、近年最高だった 2004年の 1,022万 tは超えると推察される。

7月の供給国をみると 129万 tのうち日本の 52万 tが 1位であり、シエアは 40%、次いで米国 47万 t（同 36.4%）であり、2カ国で 80%近い。他はカザフスタン 4.1万 t、ドイツ 3.4万 t、韓国 3.0万 t、オーストラリア 2.3万 t等で規模は小さい。

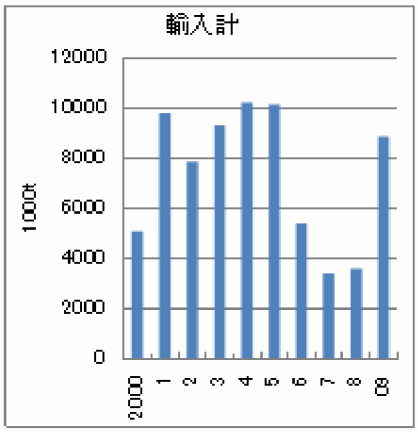
09年 1-7月間では、日本と米国が拮抗して推移しており、累計は日本 305万 tに対して米国 314万 tとほとんど変らない。しかし現状は日本の高値相場をきらって米国ソースに引き合いを増す動きがあり、今後、日本は引き離されると予想する。

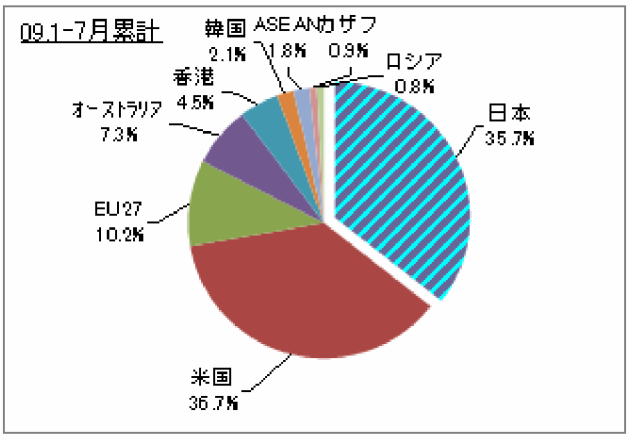
中国の主要供給ソース推移



データ;中国「海関統計」

中国の鉄スクラップ輸入量 09年 1-7月累計





データ;中国「海関統計」

以　上